

# Harp Caravan

ハープ・キャラバン第3回

## 和装ハーピスト 綾



ハープが輝いている街／ハーピストたちを訪問する  
ハープ・キャラバン第3回目は、和装ハーピストの綾さんだ。着物をまとしてハープを弾く音楽家である。折々に着物でステージに上がった奏者はこれまでもいた。しかし、一貫して着物で通すばかりか、音楽性に関しても「和装」に徹するハーピスト奏者というのは、恐らく初めてではないか。無論、当初は綾さんも西洋のクラシックに親しみハープを手にした。しかし、演奏活動を続けるうち、自分が真に表現したいものは何なのだろうと思いはじめた。自問自答して内観を問うと、日本人として歴史や文化に興味があり、それらを愛して止まないハープで表現したいという答えに行き着いた。綾さんは、抱いた疑問に対し一旦立ち止まって考えることで、ハープの新たな表現領域を得たといえる。

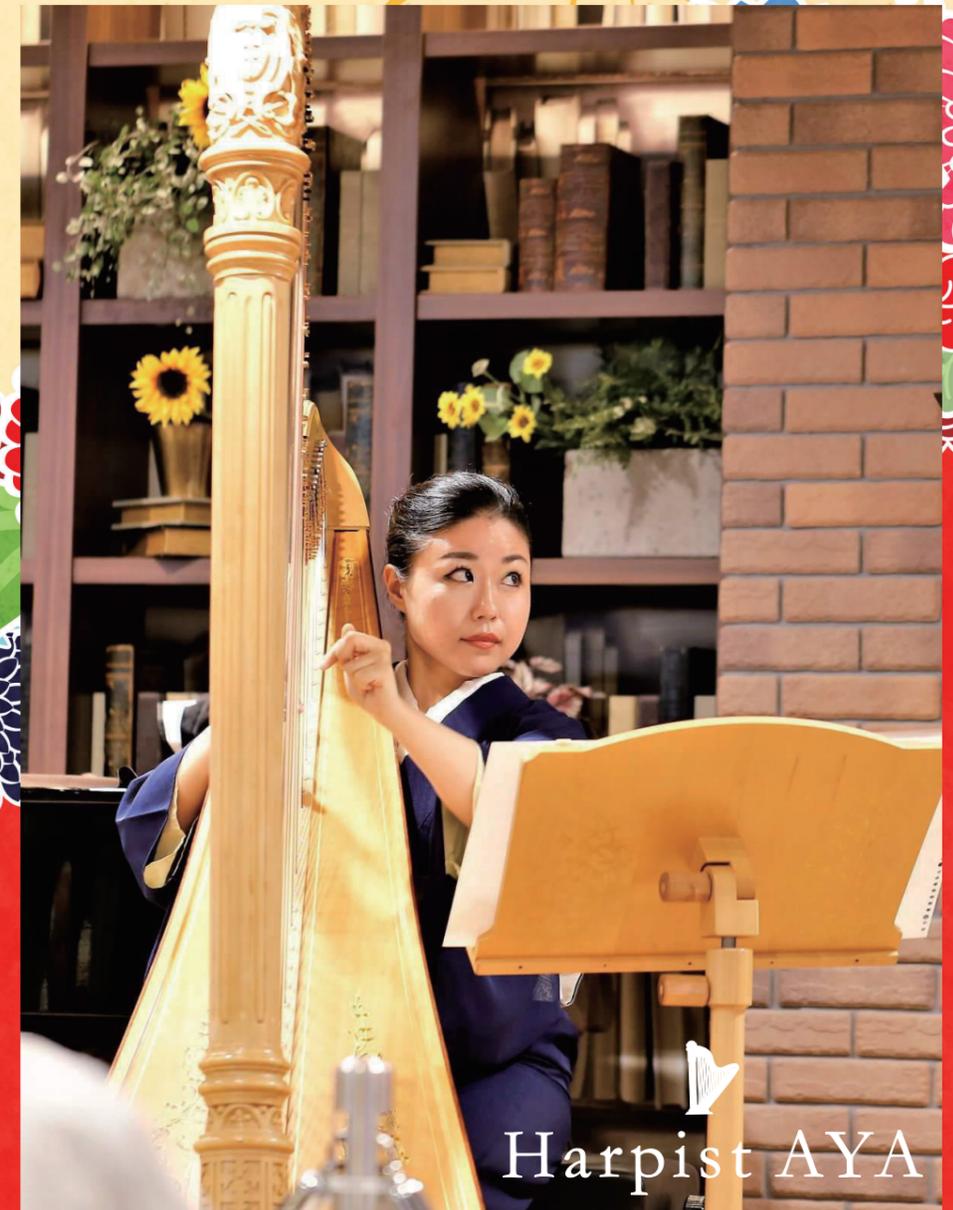
考えてみれば、ハープは豎琴である。かつて「ビルマの豎琴」という映画から、ハープという意識が顕在化した。正倉院のお宝の中には箏篋(くご)というシルクロード伝来のハープの原型が収められていたことはすでに判っている。日本人は、何もハープ=西洋の楽器と位置付ける必要もなく、実は「私たちがハープ=豎琴を長らく弾いてきた」という誇りこそが、実は最も欠落する要素なのかもしれない。和琴では着物をまとして弾くのなら、豎琴であるハープも着物をまとして演奏されることは、何らおかしいことではない。ましてあらゆる方面で、伝統が消え

てゆく現状を見つめていた綾さんが、ハープと着物を結び付けるのに、そう時間はかからなかった。

活動を本格化させて1年経ち、その成果を11月9日に名古屋市熱田文化小劇場で問う。デビュー1周年記念リサイタルは、二部構成。当日は同時にCDもリリースされるという。日本唱歌も交えるものの、ほとんどがオリジナル曲という意欲的な内容で、特に第二部では小野小町を採り上げ、いにしえに存在した薄幸の伝説の美女に想いを馳せ、現代の視点から自らしたためた台本の朗読も交えて、平安女性の一生を謳い上げてゆく。当日はなんと十二単を着てハープの演奏にも挑むという。なぜ、そこまで着物にこだわるのだろうか。

「私の演奏活動を聞いて、大切な御着物を譲って下さる方も出てくれたのです。様々な理由でしまわれていた着物の思いを受け継ぎ、伝えてゆくのも私の役目。また、着物は日本の伝統そのものを、自身がまとうことが出来るもので、着物でステージが上げられることをたいへんうれしく思います」。着物によって、演奏上の不自由も生じるかと思うが、「ペダル操作が大変でした(笑)。しかし、毎日着物をまとうことで身体になじみ、着物の声をきちんと聞くことで、だんだんと思ったように身体が動くようになりました」と、意に介さない。今では、演奏会場へ着

物を召して参加されるファンも珍しくなくなったという。着物を着てゆく理由がないなら、着て行ける場を作ればいい。こうした発想が、新たにハープの聴衆や関心を生み、従来のハープ・ファンには、和をテーマにした音楽コンセプトで温故知新の耳目を引く。グローバリズムという言葉が横行して久しいが、翻って私たちは日本人であることの意義を日々問い直しているだろうか。外国からの観光客や、コンビニの店員さんに外国人が増え、「日本語の上手い外人さん。が多くなったと喜んでいうちは良かったが、さて日本の今昔や文化を問われたときに、胸を張って応えられるだろうか。伝統は守るだけではもたない。綾さんは、着物とハープをベースに、海外への渡航や挑戦をためらうことなく、今後もあらゆるものとコラボして行きたいという。グローバリズムという言葉の前に、まずは行動で一石を投じる。こうした綾さんのような姿勢こそ、真のグローバリズムに通じるのではないだろうか。



Harpist AYA